5　府内小中学校のキャリア教育実践事例

「すべてのいのち輝く一丘小学校を創る」

～ SDGs の取組みを地域や社会に広げよう ～

泉南市立一丘小学校

【本校児童の現状と課題】

本校には、提案されたことや興味を持ったことは、素直な気持ちで前向きに受け入れ、教職員の想像を超えるユニークな発想をしたり、こつこつと努力を重ねることができたりする児童が多い。その一方で、新たなことに積極的にチャレンジしたり、自ら発想し、やりたいことを提案したりすることや将来を見通し目標を持って計画的に学習したり、自主的に学習に取り組んだりすることに課題が見られることから、多様な経験の機会をつくることが必要だと感じてきた。

また、ここ数年、児童数の減少が顕著となり、単学級の学年が多くなることで、友だち関係が固定化され、一度友だちとの関係が崩れてしまうと、修復が難しくなる場合もあることから、相手の気持ちを大切にしながら、自分の思いを伝える力を高めていきたいと考えていた。

そこで、令和５年度は、全学年で新たなことにチャレンジできる環境づくり・人との出会いの機会づくりを全体指導計画に位置付け、一層のキャリア教育の推進をめざしていくこととした。特に高学年児童は、自己肯定感や社会参画意識の向上、“だれ一人取り残さない”をテーマに、進学後もつながることができる仲間づくりを目標とし、地域や社会にフィールドを広げた学習課題の設定をすることとした。

【キャリア教育目標】

中学校区　キャリア教育目標

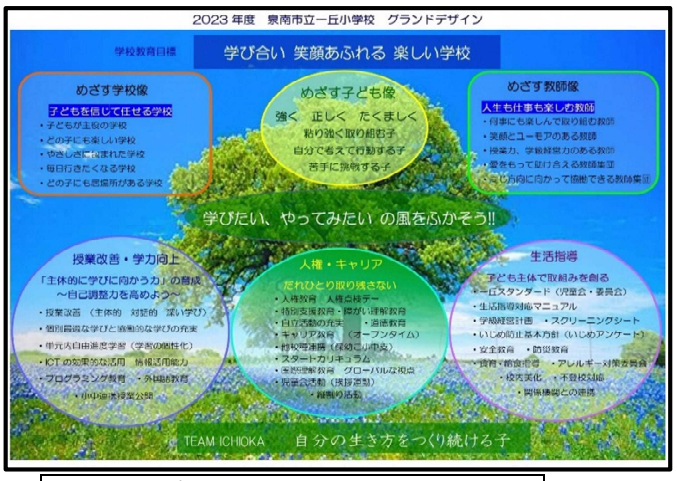
『めざすハタチ像：自分の生き方をつくり続ける子
～自分を信じる、あきらめない、つながり合う～』

一丘小学校　キャリア教育目標

『学びたい、やってみたいの風をふかそう！
～だれ一人取り残さない一丘小学校に～』

高学年総合的な学習の時間目標

一丘小学校や一丘地域の自然と遊び、
人やものと出会う。
そこから、探究する課題を決め、考え、行動に移す。
自らする、自ら創りあげる総合学習へ！



キャリア教育の取組みにおける教職員の思い

タブレットが導入され、「分からないことはタブレットで調べよう」という教員の言葉かけが日常的となり、児童にも浸透している。児童がタブレットを使いこなせるようになればなるほど、調べたいことまで早く到達できるようになり、便利な一面も多々ある。しかし、情報収集が容易になったことで体験することや、人やものと出会う機会が少なくなり、達成感を感じたり自己肯定感を向上させたりすることができる機会や、地域や社会に積極的に関わる力を育成する機会が減少してきているのではないかと感じている。

そこで、中学校区キャリア教育全体指導計画にある３つの柱、①「自分を信じる」　②「あきらめない」③「つながり合う」を大切にし、様々な人やものと出会うことで興味を広げ、主体的に課題を見つけることや、それぞれの出会いを通して、将来を見据え自分がやりたいこと・やってみたいことに挑戦できる環境を整え、自分の生き方を考え、生き方をつくり続けることができる児童になってほしいと思い、キャリア教育を推進している。今回は５年生の取組みを紹介する。

学年			小学５年生
発達段階の大目標			● 自分を知る ● 自分を生かそう ● 自分を大切に
キャリア教育の柱	自分を信じる	重点目標	● 自分の個性に気づき、生かす。 ● 自分が挑戦したい役割を選び、責任をもって果たそうとする。 ● 規範意識をもち、信頼される行動をとる。 ● 課題や困難が生じた場面において、解決方法を工夫して解決する。
	あきらめない		● 夢や目標に向かってあきらめずに努力することの大切さがわかる。
	つながり合う		● 身につけた知識を活用する。 ● 社会のいろいろな役割、その大切さを知る。 ● 思いやりの気持ちをもち、相手の立場に立って考え行動する。 ● 自分の思いや考えを、場に応じた態度で適切に伝えることができる。

『中学校区キャリア教育全体計画』一覧から一部抜粋

【５年生「総合的な学習の時間」取組み】

本校は、令和４年度は６年生、令和５年度は５年生が府の「わくわく・どきどき SDGs ジュニアプロジェクト」に参加している。２月に実施されるオンラインポスターセッションに向け、１学期はさまざまな人やものと出会い、興味を広げるための取組みを進めた。そして、２学期は課題を見つけ、自らやりたいこと・やってみたいことに挑戦する取組みを進めた。

★５年生「総合的な学習の時間」　年間指導計画

１学期	○米作りチャレンジ（５月～12 月） ○国際交流（年４回） ○地域の企業から学ぶ SDGs ○一丘地域の自然環境を守る ○福祉道具体験から考えるより良い一丘の街づくり
２学期	○課題を見つけ、チャレンジしよう ○学びを地域や社会に発信しよう① （イオンモールりんくう泉南店）
３学期	○学びを地域や社会に発信しよう② （校区内小学校交流、府「わくわく・どきどき SDGs ジュニアプロジェクト」オンラインポスターセッション）

★【様々な人やものと出会い、興味を広げる取組み】

○米作りチャレンジ～地域の農家の方から学ぶ～

「米作りのことをもっと子どもたちに知ってほしい」という地域の農家の方からの言葉を受け、本校では初めて、田んぼに伺い米作りの様子を見学したり、泥遊びをしたりバケツ稲にチャレンジしたりする機会を設定した。

６月に、田植え前の田んぼで泥遊びする機会があり、全員が初めての経験である泥の感触を楽しみながら、ドッチボールや鬼ごっこ、生き物見つけをして楽しんだ。泥遊びをしながら農家の方と話をしたり、田の周辺に置いてあるさまざまな機械を見たりしたことで、事後アンケートには、「あるテレビ番組では、機械を使わず米づくりをがんばっていたけど、実際の農家の方の家には、見たこともないいろんな種類の機械がたくさんありました。肥料と米苗が一緒に出る機械がすごかったです。」「米作りは思っていたのと全然違いました。家族にバケツ稲のことを話すと、おじいちゃんが米を作っていることを初めて聞きました。」などの回答があり、児童の米作りや「農業」という仕事に対する興味が膨らんだことが、読み取ることができた。

田植え見学の様子

バケツ稲の成長過程を観察する中で、米の花や稲にやってくる生き物等について興味や疑問を持ち、自主的に調べ、まとめる児童もいた。11 月はバケツ稲の収穫時期となり、児童は初めて鎌を持ち、収穫した。収穫した稲を全校児童が通る玄関に干したことで、多くの児童が興味を示し、「５年生になって米作りできるのが楽しみ」「これのどこに米がついてるの？」と５年生児童と会話をする他学年児童の姿を見ることができた。その際、自信をもって米作りのことを伝える姿が見られた。

「バケツ稲の育て方を次の５年生に教えたい」と言った児童の感想や、「米づくりについて子どもから教えてもらいました」といった保護者の声も聞くことができた。これらの体験が児童の心に残り、残食について考える機会や新しいことにチャレンジしたことへの達成感につながった。

○地域企業から学ぶ SDG s

①イオンモールりんくう泉南店

「やりたいこと・やってみたいこと」を考え、創り上げていくにあたり、多くの児童が休日に家族と一緒に過ごす場所として身近にあるショッピングモールに年間を通して協力を依頼した。

店舗内のフードドライブや節電の取組み紹介だけでなく、企業として取り組んでいる 100%リサイクルのシステムや森づくり運動等、幅広い取組みを紹介していただいた。また、チャレンジするテーマを決める際、児童が感じている身近にある課題や、やってみたいことを伝え、従業員の方から「イオンモールではこんな風にやっているよ」といった具体的なアドバイスをもらい、より具体的な取組みを考える機会となった。実際に家族でイオンモールに行き、SDGs の取組みを発見したり参加したりする児童もいた。

②ケアプランセンタープラスワン

毎年実施している「車いす体験」を、地域や社会にフィールドを広げ、地域の課題解決に向かう取組みにすることができないかと考えた。そこで、地域の企業に依頼し、さらにその企業から複数の企業に働きかけていただいたことで、多くの介護・福祉の専門家の方々に協力してもらうことができた。電動車いすや最新の福祉用具について知ることや、校区内を車いすで巡

る体験は、一丘の街の良いところやより良い街にするために必要なことを考える貴重な経験となった。

★【やりたいこと・やってみたいことに挑戦する】

２学期は１学期にさまざまな人との出会いを通じ、子どもが感じた課題について、児童自らがやりたい・やってみたいことを考え、チャレンジする授業を開始した。児童は以下の６グループに分かれた。

①残食リサイクル日記

このグループは、米作りの体験から学級内の残食を課題と感じており、「給食の残飯を使って堆肥づくりがしたい」という児童の声からできた。堆肥づくりに加え、家庭で腐らせてしまいやすい食材等をアンケート調査した。

堆肥づくりのために廃棄する給食のパンを入れた

この取組みを進める中で、給食センターから、本校の学級ごとの残食量のデータをもらい、児童は４年生の残食量が圧倒的に少ないことを知った。そこで、４年生にインタビューに行き、完食に向けて以下の取組みをすることで、残食量が減っていることが分かった。

「学級の残食量が多いことに子どもたちが課題意識を持つ」「校内に配置されている栄養教諭に依頼し、給食の月別残食量のデータをもらい、他の学級と残食量（kg）を比較」「『完食カレンダー』を作り、完食できた日に「完食」と記入していく」

このような取組みを通して、毎月の学級残食データが減っていくことをやりがいに感じ、頑張り続けているとのことだった。

そして、４年生の取組みを、５年生だけでなく全学年に広め、実際に残食量を少しずつ減らすことができている。また、学校で使っている肥料の代金を調べ、「残食から作る堆肥量を毎年増やしていきたい」と、意欲を見せる児童もいた。

②初めての米作りチャレンジ

～地域の農家の方から教えてもらったこと～

農家の方にインタビューを行ったり、学習してきた米の成長記録をまとめたりした。

③お年寄りを助け隊～より良い一丘の街を考える～

校区を車いすで巡回した際に感じた、一丘の街の良いところと、「もっとこうなればいいな」という課題についてまとめた。

児童が感じた車いすが一番通りにくかった場所

④環境を守りたいんです！

～一丘小の豊かな生き物を守る～

貝塚市立自然遊学館の職員の方や元高校理科の先生に協力していただき、学校内の生き物調査を行った。また、４年生と協力し、校内の自然環境にもっと興味をもってもらえるように、ニッセイ緑の財団の協力のもと、校内の木々に名札をつける活動をした。木の学習を進める中で、児童から「一丘小学校にはどんな種類のセミがいるのかな？他の小学校はどうなのかな？」という疑問が生まれ、「校内セミ大調査」を実施した。

また、市内の海に近い小学校に協力を依頼し、「海側と山側でセミの種類は違うのか？」というテーマでオンライン交流会を実施した。学校で見つけることができる生き物を星の数で“レア度”として表すことで、他学年にも生き物の興味が広がり、校内で飼う生き物が一気に増えた。調査をした４・５年生が生き物の世話をし、低学年児童に優しく説明している姿も見ることができた。

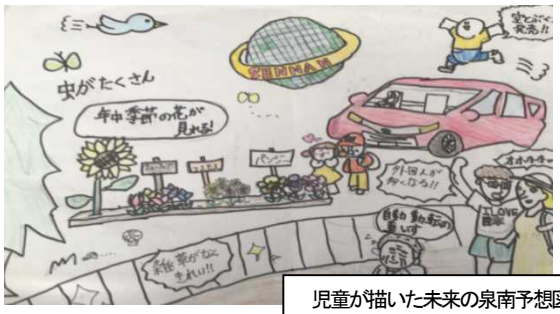
児童がまとめた一丘小学校生き物調査の結果

⑤いらない服をかえるんジャー　～服をリメイク～

家にある着ないけど捨てられない服に注目し、再利用する方法を考え、Ｔシャツをかばんにリメイクする方法等を実践した。

⑥私たちが考えた！未来の泉南予想図！！！

「バックキャスティング」という手法を児童自ら学び、そこから「こうなればいいな」という未来の泉南市や一丘小学校を絵で描いた。



児童が描いた未来の泉南予想図

【成果と課題】

イオンモールりんくう泉南店の協力を得て、店舗内を活用し、保護者や利用者の前でSDGｓについて自分たちが調べたこと、考えたことを発表した。また、中学校区の他の小学校ともポスターセッションを行った。

イオンモール店舗内での発表の様子

発表後の児童の感想

- SDGsの歌や「自分たちでやってみる」ということをやってきて、心に残った。
- 初めて米を育てたり、田んぼで泥遊びできたことが、とても楽しかった。
- 今までインターネットで調べることが多かったけど、やってみることが初めてで楽しかった。
- 「イオンで発表する」と聞いてとてもわくわくしながらこの活動をしていました。大変なこともあったけど、無事に発表できて良かったです。

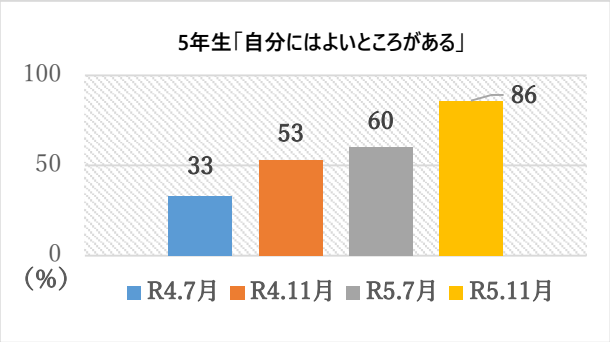
発表後の保護者の感想

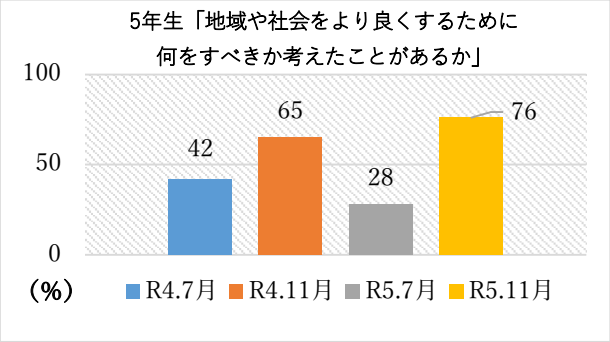
- SDGsについて自分たちが何をしたかったのか、どうすればよくなっていくのかがまとめられており、とても分かりやすかった。
- 自分たちで調べて実践してきたことで自信がついたことが、キラキラした表情から伝わってきたので、とても良かったです。
- 学習方法もネットで調べるだけでなく、自分たちで見て聞いて体験したというのが、各グループの発表にとても生かされていたと思います。スマホ１つでなんでも分かる時代ですが、体験する大切さをこれからも学習に取り入れてほしいなと思います。

児童の感想には「実際にチャレンジしたこと」を肯定的に捉えているものが多かった。また、保護者や学校外の人から自分たちの学習の過程や成果を評価してもらうことができた。

児童アンケートの結果

定期的に実施している児童アンケートは以下のような結果となり、これらの取組みが児童の自己肯定感、社会参画意識の向上に繋がっていると捉えている。





多くの企業の方や地域の方に協力していただくことで、さまざまな人やものと出会い、体験しながら学ぶ取組みをつくることができた。これらの取組みにより児童は地域・社会との繋がりを実感することができた。また自らの課題意識に基づく探究的学習は、児童の積極性を引き出すこととなり、その成果を地域・保護者や他の学校の児童と共有することで、より自己有用感、自己肯定感を高めることとなった。

これらの学習が今年度だけのものにならず次年度以降につなげることで、コロナ禍により希薄になっていた学校と地域社会との繋がりを再構築していく必要がある。地域で暮らす方や企業の方に学校の取組みを理解していただき、継続して協力いただける方だけでなく、さらなる人材を確保していく必要があると考えている。

これからも児童の力を信じ、児童自らがやりたいこと・やってみたいことに挑戦できる環境づくりをコーディネートし、すべての児童が自分の生き方を考え、つくり続けることができるような学校にしていきたい。

5　府内小中学校のキャリア教育実践事例

生徒の願いを形にする「共創プロジェクト」の学び

～「ふみ出す」をくりかえして身につける「自芯」～

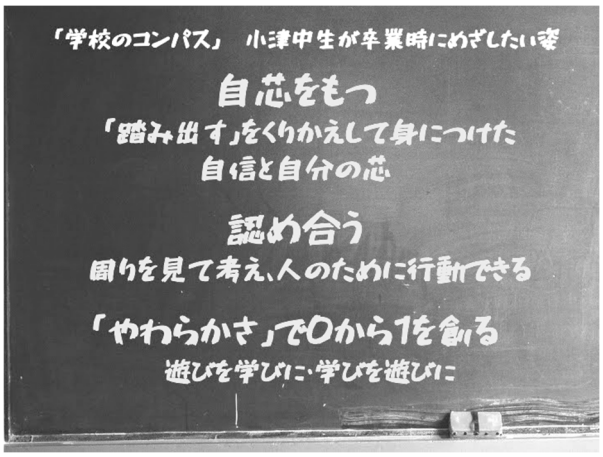
泉大津市立小津中学校

〈キャリア形成とこれからの学校〉

これまで、本校のキャリア教育・進路指導では、主として２年時に外部人材を活用した取組みを積極的に行ってきた。地域の起業家を中心とする方々に、「これからの社会に対するものの見方」、「自分自身の価値観に気づく価値観ゲーム」などの実践的なワークショップを行っていただいた上で、地域の多様な職種の方の協力を得て行われる職業講話を経て、「10 年後の自分自身のビジョン」を表現するビジョンボードを作成し、最後の「夢作文」を発表するというものである。この取組みは現在も続けられ生徒が将来のビジョンを明確にし、積極的な進路選択を行うことに寄与してきた。一方で、学習塾等により偏差値に依存した高校・大学選びの指導が行われることもあり、個に応じた多様な進路選択が実現できているかといえば、心もとない側面がある。

そこで今年度は、学校が生徒の「やってみたい」という気持ちを後押しし、チャレンジを繰り返すことのできる「場」になることをめざし試行錯誤を繰り返している。そのような「場」を通して、生徒自身が、自らの適性や志向を深く理解するとともに、社会の評価基準はテストの得点だけではなく、多様な評価軸があることに気づき、将来への自信やキャリア観を深めていきたいと考え取組みを進めてきた。

〈図１小津中「卒業時にめざしたい姿（学校のコンパス）」〉



本校は今年度より文部科学省の研究開発学校に指定された。研究課題は、「生徒の願いで創る『共創』カリキュラム」である。「生徒の願い」を教育課程に反映させることで、生徒の主体性を一層向上させ、豊かに学力を育成しながら、予測困難なこれからの社会を生き抜く力を高めることをめざすものである。

その中心となるのは、生徒が自ら学校の方針づくりに参画する「学校のコンパス」プロジェクトである。昨年度末、全校生徒が話し合い、今年度の学校の運営方針となる「卒業時にめざしたい姿」（図１）を創りあげるとともに、学びたい授業の形を生徒らが議論し、「新たな授業の形」が提案された。そして、今年度は授業・行事・学校生活等のすべての教育活動について生徒が定めた「卒業時にめざしたい姿（学校のコンパス）」の実現を目標とすることが、教職員間で共通認識された。

〈共創プロジェクトの方針と実際〉

「新たな授業の形」の一つが「共創プロジェクト」という生徒主体のプロジェクト学習である。令和５年度は、以下の５つの方針によりこのプロジェクト学習を進めた。

① 生徒がプロジェクトで何を行うか提案する
② プロジェクトメンバーは学年関係なく構成される（学年の壁を超えた学び）
③ 生徒は各自が希望するプロジェクトに参加する
④ プロジェクトは生徒自らが企画・運営する
⑤ 「共創」の時間（総合的な学習の時間を発展させる）を中心とし、前期・後期の計２回のプロジェクト学習期間を設定

共創プロジェクトで最終的にめざしたのは、生徒が前述の「卒業時にめざしたい姿」に近づいていくことである。（なお、本校ではこの「卒業時にめざしたい姿」を学習指導要領に示された「学びに向かう力」を具体化したものと位置づけている）

実施にあたっては、上記を含めたプロジェクト学習の全体像を代表生徒たち（コンパスデザイナー）と確認した。また、代表生徒たちは前期の学習テーマを「興味

を広げて〇〇につなげる」と設定した。自分の「好きなこと・興味があること」を、学校・地域・社会の価値あることにつなげる、ということをめざした。

〈プロジェクトの進め方とプロジェクトの様子〉

① 各クラスでプロジェクトを考える活動を行った後、本当に実現したい具体案のある生徒が応募用紙に記入しプロジェクトを提案。提案者はプロジェクトリーダーとなる。（４月）
② 提案者が企画書を記入。企画書に基づき各プロジェクトをよりよくするための検討会を実施。(外部協力者/教員/提案生徒で)
③ ５月にはメンバー募集。各企画者が ZOOM を利用した放送で、「どんなことを行いたいか」や「どんな人にメンバーになってほしいか」などを PR。
④ 全員が希望のプロジェクトに参加。共創プロジェクト実施。（５月～９月・全 10 回)
⑤ 最終回で他のプロジェクトの様子を知る交流および振り返りの活動を実施。

※以下は前期プロジェクトの例
花言葉のブーケ～言葉だけじゃ伝えられない想いを花束にたくそう～／Radio with everyone／SDGｓゲームで良い世界へ！！／中学生Teacher プロジェクト！／めざせ令和の虎!!めざせ実業家／SS プロジェクト～スポーツを科学する～／ウクライナの人たちにカレーをふるまおう！／小津中校区の公園リニューアル／癒やしのブックカフェ空間をつくろう！！／夏のパレード／OZU カフェ～パンケーキで子どもたちを笑顔に／～マインクラフトで泉大津市を創る～ 他

今回は代表的な３つのプロジェクトについて活動の様子の一部を紹介したい。

「夏のパレード・プロジェクト」では、生徒が地域の方とともに公民館で実施される「夏祭り」を企画・運営した。そこから発展して生徒と地域の方との協働でお化け屋敷などもつくった。公民館の担当者からは、「生徒らによる夏祭りの企画運営・広報・出店という行動により例年以上に多くの子どもたちがイベントに参加することにつながり、大人も子どもも笑顔にしてくれた」というコメントが届けられた。プロジェクトメンバーの生徒たちは「自分の意見だけでなく周囲の意見を聞いて認め合うことや、これまで関わることのなかった他学年の人と認め合うことを通して自分の意見に自信を持つことができるようになった」、「小学生への対応は思った以上に大変だった」、「いつもは客側だが、今回は自分たちが店員役をやったことで自信をもつことができた」、「困っている時に仲間が助けてくれ、自分ももっと困っている人を助けていきたいという考えが生まれた」などと振り返っている。

「花言葉のブーケ・プロジェクト」では、生徒が「花言葉」をモチーフにしたオリジナルの花束を地域のフラワーショップに提案した。実際に生徒が考案した花束が店頭にならび、生徒が制作した花言葉カードとともに販売された。生花店の方からは、「店では考えつかないプロジェクト」の提案があったことへの感謝が述べられた。また購入客から、直接メッセージを受け取った後、このプロジェクトのリーダーを努めた生徒は「自分たちだけが楽しむのではなく、お店の人やお客さんのことを考えて喜んでもらえるように対話を重ね、花束を作り上げることができて良かった」と振り返るとともに、今後は「植樹を行うプロジェクトに参加したい」などと社会貢献活動に興味を広げている。

「ウクライナの人たちにカレーをふるまおう・プロジェクト」では、戦時下にあるウクライナの人々に手作りカレーを届けることを探究した。この活動は後期の活動でも継続して行うこととなり、フードロス食材を加工する業者やOECDの仲介によりウクライナの小学校と連携した国際支援が実現する見込みである。プロジェクトに関わったメンバーの生徒たちは「最初はウクライナのことをあまり知らなかったがニュースを良く見るようになった」、「資金集めのことを考えるようになってから、募金をどのように行っているかに興味が出てきて、どうすれば資金が集められるか考えるようになった」と社会への関心の広がりについての感想を述べる一方で、「チームワークが成り立たず苦労している」、「やる気に差があり、どうしていいかわからない時がある」など、メンバー間のコミュニケーションやモチベーションの差といった課題に悩んでいる姿も見受けられた。

生徒たちは、戸惑いながらも自ら提案したプロジェクトに非常に前向きに関わることができていた。

※上記写真は前期共創プロジェクトの様子

〈前期共創プロジェクトの成果〉

成果について、前期共創プロジェクトの事前および事後に行った調査の結果は表Ⅰのとおりである。

表Ⅰ（調査結果）

質問項目	肯定の割合（事前）	肯定の割合（事後）
1. 自分は自信を持って行動することができる	66.7	77.3
2. 他の人は自分の話を聞いてくれる	90.4	92.6
3. 自分の意見をしっかり持つことができる	80.3	82.5
4. プロジェクトの話し合いや活動の時間は楽しそうですか・楽しむことができたか	72.6	90.3

そもそも本校ではここ１・２年、自己効力感や対人的な関係についての調査項目全般について高い数値を示す傾向がある。こうした傾向は、生徒会活動を含め「学校のコンパスづくり」や「校則見直しの活動」を始めとする生徒主体の取組みによるものと考えている。

今回の調査結果から、自信を身につけた生徒や、他の人が自分の話を聞いてくれるという安心感を持つ生徒が増加したことが見て取れる。（質問項目１・２）また、事前調査に比べ多くの生徒が事後に「プロジェクトの活動を楽しむことができた」と回答している。

このような活動を通した、プロジェクトへの前向きな意識が、後期（11 月～２月）のプロジェクトリーダー（プロジェクトを立ち上げる生徒）の大幅な増加にもつながっていると考えられる。（生徒が単独で立ち上げたプロジェクト数は前期 14、後期 39）

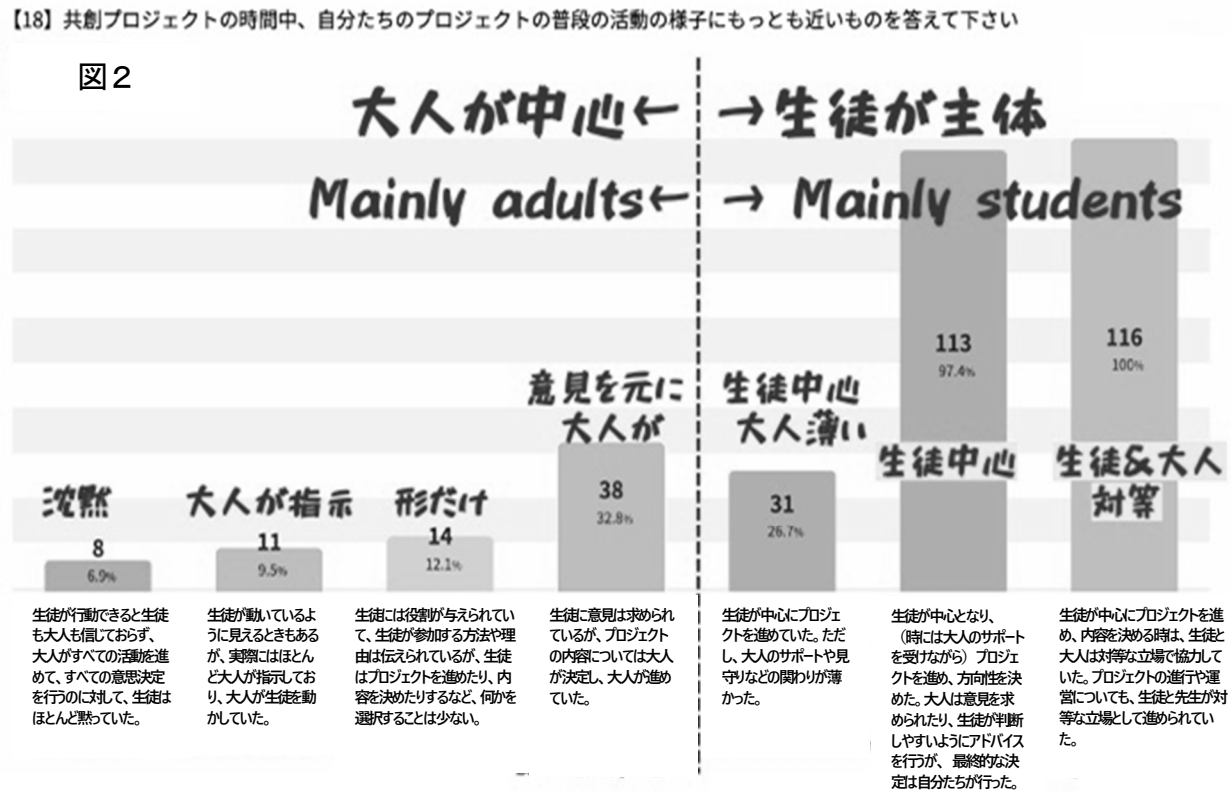
これまで、本校の活動の多くは、教職員等の大人によって設計や運営がなされ、生徒は果たすべき役割を十分に有してこなかったと感じていた。図２は、OECD のフォーカスグループが作成した「共同エージェンシーの太陽モデル」※OECD Future of Education and Skills 2030 Student Focus Group をもとに作成した調査の結果を示したものである。このグラフでは最も左は「沈黙（大人が生徒を信用しておらず生徒は発言しない）」で、子どもの主体性が全く発揮されていない状態を示し、右にいくほど生徒の主体性が高まっていることを示している。多くの生徒は「生徒中心に取組みを進め、自分たちで意思決定（右から２番め）」、「生徒中心に取組みを進め、大人とともに意思決定を共有（いちばん右）」と回答している。この結果からは多くの生徒が高いレベルで、主体的な意思決定や活動に参画できていると感じていることが確認できる。

〈前期共創プロジェクトの課題と後期の改善点〉

一方で、前期の共創プロジェクトでは生徒・教職員双方（および学識）から以下の課題が指摘された。

〈課題〉

・活動全体の枠組みが曖昧
　・・・ゴールとアウトプットが漠然としていた
・活動時間の不足
　・・・振り返りや改善する時間が不足していた
・役割と人数の調整不足
　・・・役割分担の偏りがあった（特にリーダー）
・学びの質に関する課題
　・・・学びを深めている生徒が一部にとどまっていた
・教職員の関わり方や指導体制上の課題
　・・・サポートやエンパワメントが必要な生徒が偏っていた
・形成的な評価の仕組みが不十分
　・・・学習者が身につける力についての検討が必要であった　等



このような課題の指摘を受け、後期は下記の改善を実施した。

① ゴールとなる明確な枠組みを設定
文化祭に加え、地域イベント的な発表日「努力が実る桜の祭り（ど桜祭）」を設定
② 活動時間の確保（複数教科とのコラボ型授業/枝分かれ型授業として）
③ プロジェクトの組織化（「系統」を設定・複数教職員対応・人数限定・役割明確化）
④ 教職員の関わり方の確認　「聞いて・助けて・任せて・見守る」等
⑤ 外部サポートの強化（地域企業/団体サポーターの組織化・共創プロジェクト応援隊の整備）
⑥ 自己評価を中心とした形成的評価の仕組みを整備

12 月時点で、後期は３回のプロジェクト学習を終えたが、前期に比べ生徒の意欲は向上し、各プロジェクトとも概ね順調なスタートを切ることができている。

〈まとめ〉

共創プロジェクトは、本校の学習活動としては最も各生徒の意思決定が重視され、最も生徒自らによるアウトプットが行われた学習活動である。生徒が創り上げた「卒業時にめざしたい姿」の第１項には「自芯をもつ～「ふみ出す」をくりかえして身につけた自信と自分の芯～」とある。生徒たちはこの目標のとおりに試行錯誤を重ね、積極的に活動に取り組んでいる。

この取組みの成果が、豊かな自己理解やキャリア観の形成につながり、生徒の「自芯」になり得るかは、今後実践を積み重ね、さらに検証を行っていこうと考えている。

（関連動画・HP リンク）
◯「学校のコンパスづくり」
「共創プロジェクト」についての
放送部２０２２作成の動画（８分）
https://www.youtube.com/watch?v=7mGXJswAB6c

◯小津中ＨＰ：
http://izumiotsu.schoolweb.ne.jp/izumiotsu/ozu-j/
◯小津中 note（生徒が書いた記事を多く発信しています）
https://ozu-jhs.note.jp/